

## 関西大学考古学等資料「梵鐘拓本」

### 資料と紀年名の記載形式について

角 田 芳 昭

◇ 本学考古学等資料の中に日本・朝鮮・中国の金石文拓本一千八百余点があり、このうち「梵鐘類」の拓本二百余点の目録を上げ、若干調査したことを記してみたい。

梵鐘の研究は『日本の梵鐘』(昭和四十五年角川書店)、『日本古鐘銘集成』(昭和四十七年角川書店)、『佚亡鐘銘図鑑』(昭和五十一年ビジネス教育出版社)を刊行された坪井良平氏の多年の業績をもって集大成された観がある。しかしこれも慶長以前のものであり、元和以降は今後の研究に期待しなければならぬ。梵鐘の歴史的研究、一般論等は過去に多くの先人達により研究発表されているので、これらを参考にしつつ「梵鐘における紀年銘の記載形式」について略述してみたい。

梵鐘には、鑄造発願の趣旨、寺院の来歴、時代、願主

檀那、鑄工など鑄造の由来と功德を述べた銘文が表現されているのが普通である。表現方法には陽鑄、陰刻、陽起の三種があり、原銘、追銘、旧銘、後銘と四時期に区分される。そして銘文の形式として三種類あり、「序」と「銘」の二部分から成っているもつとも完備した形式のもの、「序」と「銘」の区別なく、紀年、寺名、願主、檀那、鑄工など一連に記して銘辞のあるもの、簡単な紀年、寺社名、願主等を記すほかに一切の銘辞を持たぬものなどに区別される。

以上銘文の形式であるが、次に記載形式について考えてみたい。この紀年銘の記載形式については、石田茂作氏が考古学雑誌第二十巻第七号(昭和五年)に「造像銘記」を主材にした、紀年銘の記載形式に就いて発表されて以来多くの研究者がこれを引用している。本学梵鐘資

料もこの記載形式を参考にして考えてみたい。



先ず年次の記載形式を大別してみると次の六種をあげることができる。

- 一、年号年次なく、ただ干支のみのもの
- 二、干支なく年号年次のみによるもの
- 三、年号年次干支を具備するもの、その(一)
- 四、年号年次干支を具備するもの、その(二)
- 五、年号年次の下に干か支のいづれかをつけたもの
- 六、年号と干支のみを記し、年次をあらわす数字を欠くもの

以上の六種にそれぞれ内訳がつきその数十八形式であらわすことができる。

一の用例のものとしては、古来より有名な京都「妙心寺」鐘がある。銘文は鐘の内面に下端から約一メートルのところから始まり戊戌年四月十三日壬寅取糟屋評造春米連広国鑄鐘の文字二十二字を陽鑄している。戊戌年は文武天皇の二年(六九八)に当るといわれている。梵鐘においてはわが国最古の紀年銘を有するものであるが、糟屋評造、春米連広国が発願者の名とも鑄物師の名ともいわれ、続いて今後の研究が必要である。他に干支の上に歳次、歳在を記している例もあり三形式となる。

二の用例に属するものとしては、年号制定後における紀年記載の最も簡単な形式であり、現今最も普通に用い

られているもので、年号の下に数字的年次を書き続けたものである。福井県織田神社「神護景雲四年」の銘がこの例である。他に年号の下に第の字を加えている場合があり二形式を数える。

三の用例に属するものとしては年次の記載としてもっとも詳細なものであり「歳次」「歳在」「歳舎」「大歳」「龍集」等の字句の使い方によって数通り分けられる。奈良興福寺「神亀四年歳次丁卯……」銘は梵鐘銘歳次の最古の用例である。奈良時代にこの例多く、鎌倉時代頃までこの形式が行なわれている。「歳在」は奈良時代でも少なく、中世以降では極く少ない。大分県安住寺の「文和二年歳在癸巳五月十八日」が鐘銘では最古と思われる。

「歳舎」は戦国時代以降に使用されており、岐阜県光得寺「天正歳舎丙仲春」銘の例がある。「大歳」又は「大才」と記しており室町時代以降はほとんど使用されていない。埼玉県川越養寿院鐘「文応元年庚申……」がこの例である。歳次、次在、歳舎、大歳等とかくところに龍集の文字を使っていることがある。愛知県一宮市天祥庵「享徳二稔龍集癸酉……」鐘銘は最古と思われる。

四の用例に属するものとしては歳次、歳在、歳舎、大歳、龍集等の文字を用いることなく年号年次の下に直ちに干支を記したもので、その文字の配列によって五種に分けられる。

①島根県鰐淵寺の「寿永二年癸卯……」銘では年号年

次干支とを同じように書き下したもので、平安鎌倉時代にも広くこの形式が行なわれている。

②奈良県吉野郡麿世尊寺「永暦元年辰……」銘のように干支を横に細字で分書したところが前者と異なる。この形式は奈良時代には少なく鎌倉時代に入ると最も多く普通の形式として用いられている。

③愛知県一宮市妙興寺「永和第二丙辰」銘のように干支を細字で年号の右下に書いたもので、鎌倉時代以降のものに限り、この紀年銘はごく少ない。

④愛知県岡崎市法蔵教寺「峯慶長十七壬子曆」銘のように干支が細字でしかも斜めに分書している。この用例は鎌倉後期から室町時代にかけて多くその後少なくなり江戸時代に又多くの用例が見受けられる。

⑤これまでのものは干支を年の下に記載しているが、そうでなく年の上、数字との間に干支を入れたものがある。愛知県法蔵寺「明応七戊午年霜月十七日」の銘で、室町時代にこの書式が多い。又岐阜県星輪寺「明德二酉年三月十二日」銘のように干支の字配りには分書とそうでないものがあるが、このような用例もあることを記しておく。

五の用例のものとしては『三河国宝飯地方金石文集』三河蒲郡町天桂禅院「承元巳三月」（一二〇九年）（佚亡鐘）銘のように年号年次に支のみをつけたものである。本学鐘銘拓本には例がない。又年号年次に干のみをつけ

たものの用例は次のようなものである。

『飛州志』喚鐘飛驒高山宗猷禅寺「文明十一年己亥六月吉日」（一四七九）（佚亡鐘）これらの用例は非常に少ないが、足利時代に良く使われている。

六の用例のものとしては大阪府柏原市光得寺「干時寛喜巳丑」銘、新潟県加賀田氏蔵「康永癸未五月」銘、山梨県栖雲寺「延文己亥季冬廿日」銘、京都府本国寺「文禄癸巳九月吉辰」銘等であり、この用例は各時代にわたる割合と多い。

以上年次の記載形式について十八形式を考えてみたが、この他に次のような銘記もある。「年」の文字の代りに季、季、季、稔、天、曆、歳、載、祀等の異字を使っている場合がある。又干支の記載にあたって、特にその異名を用いていることがある。大阪町中鐘「寛永十一閏逢閏茂季秋吉日」銘は閏逢が甲、閏茂が戌である。又京都高台寺「峯慶長十一年柔兆敦牂小春中流良辰」銘は柔兆が丙、敦牂が午である。

年号の中で私年号を使っていることもときにあり板碑等に多く梵鐘には見い出さない。南北朝から室町時代に地方的に存したもので、泰平（一二七二）、和勝（一一九〇）、迎雲（一一九九）、白祿（一三三六）、白鹿（一三四一）、大道（南北朝）、天靖（一四四三）、福德（一四九〇）、弥勒（一五〇六）、命祿（一五〇六）、永喜（一五二六）、宝寿（不明）等が見られる。



次に月次の記載形式を考察すると、正月、二月、三月、四月と記載するものが最も普通であり古来より九割まではこの形式であるが、詩的名称ともいえる月の呼称が用いられていることがある。

高松市法泉寺「元徳二丙午青陽銘は孟陽、正陽などと同様、青陽は正月の異名である。鎌倉円覚寺「応永丁丑仲春日」銘は仲陽、酣春などと同様仲春は二月の異名である。

山口県正法寺「正平十八年卯活洗初八日」(本学資料ではない)鐘銘は弥生、墓陽などと同じ活洗は三月の異名である。

愛知県蒲郡市勝善寺「寛喜二年庚卯月三日」銘は四月の異名であることはいうまでもなく、卯月の文字は他の月の異名より最も多い。南北朝以降室町、桃山時代にも多くの用例がみられる。

大阪市大蓮寺「千時寛永十九年壬午初夏二十五日」銘も初夏、首夏、孟夏、始夏、維夏等と同様四月の異名である。

『越後の古鐘』に越後浄心禅寺「明恵第参申仲夏下澣吉日」銘文中、仲夏は皐月、梅月、梅夏とともに五月の異名である。

大阪市難波別院「文祿五丙申曆林鐘下旬第四日」銘は仲呂と同じく十二律の一つで林鐘は六月の異名として用い

られている。

京都市引接山寺「康暦元年己未孟秋四六之天」銘は桐秋、蘭秋、初秋、新秋など孟秋は七月の異名として用いられている。

大阪市本覚寺「正保第二乙酉曆仲秋中旬八」銘は葉月、桂月、秋風月、秋半、季秋等とともに仲秋は八月の異名である。

滋賀県来迎寺「元龜三壬申年菊月吉日」銘は長月、亥月、祝月、寢覚月等とともに菊月は九月の異名である。

寝屋川市本尊寺「嵯寛永十四丁丑應鐘中旬」銘、京都市高台寺「嵯慶長十一年柔兆敦牂小春……」銘等、応鐘、小春は神無月、神去月、初霜月などとともに十月の異名である。

山梨県広厳院「嘉暦二季黄鐘廿七日」銘、愛知県岡崎市法蔵寺「明応七戊午年霜月十七日」銘等は神帰月、仲冬などとともに黄鐘、霜月は十一月の異名として用いられている。

山梨県栖雲寺「延文己亥季冬廿日」銘、大阪市願生寺「嵯貞享二乙丑歳大呂陽日」銘、等は極月、冷月、春待月などとともに季冬、大呂は十二月の異名として用いられている。この月の異名が年間を通して一番多いのが目につく。



次に日次の記載形式を分類してみると次のようなもの

があり約八形式ぐらいに分けられる。

一、数字的に日次を表わしたものの、例えば四月十三日とか、十二月十一日とかのように数字的にあらわしたもので、古来より現代にいたるまで銘記中最も多いものである。

二、数字的日次と干支とを兼ね合わせたもの、「十三日壬寅」(妙心寺鐘)は数字的に何日とある次に干支のみを書いたものである。平安初期にも少しの用例があり、室町時代以降にはほとんど例がない。「建久七年辰十一月十九日午」(佐賀徳福寺)は日次の下に干支を細字で分書したもので、この例は平安中期に多い。

三、唯干支のみで日次をあらわしたものの、日本書紀、続日本紀の記載はいづれもこの形式であるが、銘記に残る実例は少なく、「天文三年正月庚申之日初刻」(足利学校孔子像)ぐらいのものである。

四、日次をその異名によってあらわしたものの、朔日、望日、晦日、初日、生何日、結制日、解制日、彼岸、時正等の銘記がある。「皆永仁六年戊孟春望日」(横浜市東漸寺)とあり、「正安参年辛八月初七日」(鎌倉円覚寺)「暦応三年辰四月初八日」(東京真福寺)とある。

「壬申元徳二年結制後十一日」(静岡県本立寺)、「大歳壬申正慶元年解制前一日」(伊宮東明寺)(本資料室にはない)とあり、結制は禅宗用語で安居を結ぶこと、解制はそれを解くことである。安居は禅家にあつては四月十

五日に結び、七月十四日に解くの为例とする。したがって結制後十一日は四月二十五日、解制前一日は七月十三日にあたる。

五、十日宛を一括する言葉によって日次をあらわすものの、十日宛を一括する言葉としては旬、澣、浣の三種が例としてあり、それぞれに上、中、下に分け熟字として第十日まで、第二十日まで、第三十日までをいう。「文禄五丙曆林鐘下旬第四日」(大阪市難波別院)、「永和丁巳三月下澣」(山梨永昌院)、「皆慶長十一年柔兆敦牂小春中浣」(京都高台寺)等の例がある。

六、吉祥の文字によって日次をあらわしたものの、銘記中吉日、吉辰、良辰、吉祥日、如意日、如意珠日等である。「元龜三年壬申年菊月吉日」(大津来迎寺)、「文禄癸巳九月吉辰」(京都本國寺)、「皆慶長十一年……」(中浣)「京都高台寺」,「正保第二酉稔吉祥日」(高槻市神峯山寺)、「皆明応第四乙卯穩蜡月如意珠日」(豊橋市大平寺)等の用例がある。

七、日時を指示する限定詞を略したものの、「三月日」とか「十月日」とか記したもので、これは後から記入しようと思つて記入を忘れたとも見られるが、この例が多くあるところを見ると始めからの意志でなされたと思われる。この用例の最古のものとしては広島県大聖院「治承元季丁酉二月日」鐘銘(本学資料にはない)で、続いて「治承二年六月日」(京都宿院極楽寺)(佚亡)である。

本学資料例としては「承元四年庚午十一月日」（和歌山金剛三昧院）の例があり鎌倉時代にこの用例が多く用いられている。

八、記載日に関する説明的の字句を添えたもの、この用例は多くは見当たらないが少しある。暦の中段十二直の一を日次の下に加えることが銘記中に見られる。十二直とは建（たつ）、除（のそく）、満（みつ）、平（たいら）、定（さたん）、執（とる）、破（やふる）、危（あやぶ）、成（なる）、収（おさん）、開（ひらく）、閉（とつ）で、その日の吉凶を指示するものである。戊戌年四月十三日壬寅取（京都妙心寺）等である。その他七曜ならびに二十八宿の一つを日次の下に加えていることもある。

次に銘記中に干支や数字に異字を用いている場合が多々ある。干支に異字を用いたものでは景、康、关、刁、井等があり、数字に異字を用いたものには弐、参、二、二・二、伍、玖、拾等ある。又年次の上に皆、維、維時、時也、干時等の文字をつけていることがある。「皆永仁六年戊孟春望日」（横浜東漸寺）、「時也延文元年七月五日」（神奈川清浄光寺）、「干時寛喜己丑」（大阪光得寺）等の例がある。

以上紀年銘の記載形式について年、月、日その他順をおって略述したが全体としてまとめてみたい。飛鳥白鳳時代のものには「戊戌年四月十三日壬寅取」の例にみられるように干支を主体にしており、年号の制定のない時

代、あるいは年号の制定はあっても非秩序であった時代においては当然であったであろう。

「神護景雲四年九月十一日」のように奈良時代に入ってから年号の制定が秩序正しく行なわれるようになると干支を除いている。しかし干支を記入しているものも多く、古文書類には数字的記載が多く、金石文等永久性を要するものには干支を合わせたものが多い。平安初期には奈良時代の形式が多い。

平安中期以降になると干支を除き数字的記載のみが多くなるが、これは泰平の世となり、年号の制定が秩序を保って行なわれているからと思われる。又一方干支と数字を合わせた形式として「永暦元年庚辰九月廿日」、「長寛二年<sup>歲次</sup>甲申七月二日……」のごとく干支を細字割書きする形式があらわれ、これがおおいに流行し、鎌倉中期まで続いている。鎌倉末期は五山文学の影響、絵画、書道等文学、芸術の進取的思考により、伝統にとらわれず諸々の新しい記載形式が試みられている。「干時弘安第七<sup>甲申</sup>……」の例では干時、皆等の文字を紀年の上に冠せたり、弘安七年とするところを更に第の字を加え弘安第七としたり、「壬申元徳二年<sup>結制後</sup>十一月十一日」の例では、正月、二日等数字的月名以外に結制後のような異字を用いたり、数字の四のかわりに二・二二等の異字を用いている。「嘉暦二季黄鐘廿七日」のように年の代りに「季」と書き、十一月の異名として「黄鐘」と書くなど単調を

複雑にして五山禅僧達の文字を弄ぶかとも見られるものがある。反面、寅を刁と略し、十一月日のように省略されているものも見受けられる。

次いで南北朝、室町時代の銘記は大体において鎌倉時代の踏襲であるが、干支が再び多く残っているのは、政治的混乱に不安を感じた時代相の反映だろうか。又室町末期に福徳、弥勒、命禄、永喜などの私年号が現われたのも足利幕府の統率力の弱さが一因ではないだろうか。

江戸時代初期寛永時代になると天下泰平の世と朱子学を初めとする国学の勃興により、異名、異称、異体文字等が再び多く記載されるようになる。「寛永十一閏逢閏茂季秋吉日」、天和二年龍輯壬戌春二月消良」、「元禄五禊龍舎壬申秋九月令日」などの例である。

以上記載形式について述べたが「梵鐘」に関しての名称とか異称といわれるものが存している。「鐘」の文字を用いることが普通であり、ほとんどの梵鐘に用いられている。又「鍾」の文字も多く用いられているが、これは中国、朝鮮に多くこれらの影響を受け奈良、平安時代

にも多い。これら鐘、鍾に当時の学問的仏教の影響を受けて単なる一字には満足せず種々な形容の一字を加えている。すなわち推鐘、槌鐘、撞鐘、鳴鐘、洪鐘、等であり大型仏器ゆえ巨鐘、大鐘、巨鋪、洪鐘、梵鐘などがあり、経典、仏具より派生したと見られる健椎、乾椎なども出てくる。時刻の役目もしたので時鐘、報鐘等も例がある。又小型の釣鐘の銘に小鐘、半鐘、範鐘、飯鐘、喚鐘などの例を見る。これらを学術的にまとめられたのが丸山瓦全氏で「梵鐘の異称一覧」(『考古学雑誌』第三三卷第一〇号)として昭和十九年発表されたのが最初であり、次いで諸々の研究者が発表されているが、戦後のまとまったものとして久保常晴氏の「梵鐘名称考」(仏教考古学研究)が発表されている。

次に目録に梵鐘鑄物師一覧を掲げておいたが、これらの研究には前記「日本の梵鐘」「金工史談」(香取秀真)「日本鑄工史稿」(香取秀真)に研究業績が発表されているので参考とされたい。

梵鐘拓本一覽

番号	区分	保管者	住 所	年号銘又は推定年代	西 曆 年	鑄 造 師	鐘呼称
一		妙心寺	京都市右京区花園好心寺町	戊戌年四月十三日壬寅取	六九八?	春連広国?	鐘
二		興福寺	奈良市登大路町	神龜四年歲次丁卯十二月十一日	七二七		攤槌神器 鐘
三		織田神社	福井県丹生郡織田町	神護景雲四年九月十一日	七七〇		
四		園城寺	大津市園城寺町別所	無紀年	奈良時代		
五		平等院	宇治市宇治蓮華町	無紀年	奈良時代		
六		讚岐国分寺	香川県綾歌郡国分寺町	無紀年	奈良時代		
七		神護寺	京都市右京区梅ヶ畑高尾町	貞觀十七季八月廿三日	八七五	治工志我部海經	梵鐘
八		栄山寺	奈良県五条市小島	延喜十七年十一月三日	九一七	藤原相爰命	鴻鐘
九		金峯山寺	奈良県吉野郡天川村	天慶七年六月二日	九四四		
一〇		廃世尊寺	奈良県吉野郡吉野町	永曆元年庚九月廿日	一一六〇	鑄物師散位船是守	洪鐘
一一		徳照寺	神戸市生田区中山手通八丁目	長寛二年歲次甲申七月二日酉	一一六四	鑄造匠多治比頼友等	洪鐘
一二		西本願寺	京都市下京区堀川通本願寺門前町	永万元年前後			
一三		泉福寺	和歌山県海草郡美里町長谷毛原	安元二季二月六日	一一七六		洪鐘
一四		鰐淵寺	島根県平田市別所町	寿永二年癸卯五月戊午十九日壬午	一一八三		鐘
一五		長宝寺	大阪府住吉区平野新町五丁目	建久三季清涼七月	一一九二		鐘
一六		徼福寺	佐賀県佐賀郡大和町大字川上	建久七年丙十一月十九日甲午	一一九六	鑄師秦末則	洪鐘
一七		金剛三昧院	和歌山県伊都郡高野町	承元四年庚午十一月日	一二一〇	鑄師多治比則商	鴻鐘
一八		千光寺	香川県高松市屋島	貞応二年癸十月廿六日	一二二三	鑄師散位土師宗友	洪鐘
一九		願泉寺	大阪府貝塚市中	貞応三年甲二月日	一二三四		鐘
二〇		光徳寺	大阪府相原市雁多尾畑	于時寛喜己丑	一二二九	治工藤原家嗣	椎鐘



二一	勝善寺	愛知県蒲郡市阪本町	寛喜二年丁卯月三日	一一三〇	大鑄師左兵衛志延小工廿八人	椎鐘
二二	東大寺	奈良市雜司町	延応元年己九月卅日	一一三九		鈞金具？
二三	淨橋寺	西宮市塩瀬町生瀬	于時寛元二年無射九月	一一四四		鴻鐘
二四	金剛山寺	奈良県大和郡山田町矢田町	寛元四年丙三月 日	一一四六	鑄師大工散位土師宗貞	
二五	常楽寺	鎌倉市大船	宝治二年甲戌三月廿一日	一一四八		華鐘
二六	石手寺	愛媛県松山市道後	建長三年辛酉六月八日	一一五一	大工泣内国丹治国忠	
二七	意運寺	奈良県吉野郡吉野町佐々羅	建長八年丙二月廿八日	一一五六	丹波正則等	鐘
二八	養寿院	埼玉県川越市末広町	文応元年大歳庚申十一月廿二日	一一六〇	鑄師丹治久友・大江真重	椎鐘
二九	太田新次郎氏藏	神戸市生田区元町三丁目	弘長二年壬戌十一月 日	一一六二	大工丹治国則	鐘
三〇	五尊教会	栃木県足利市小俣町	弘長三年才次美亥年二月□□□	一一六三		鐘
三一	東大寺真言院	奈良市雜司町	于時文永元年甲子卯月五日	一一六四	大工丹治久友	偷鐘
三二	長勝寺	香川県小豆郡池田町	建治元年乙亥九月八日	一一七五	大工河内国平久末	鐘
三三	大藏神社	和歌山県那賀郡桃山町寺前	建治參年丁亥九月十四日	一一七七	大工河内国平重永	鐘
三四	徳勝寺	岐阜県大垣市青柳	弘安三年大歳十月 日	一一八〇	大工西善	鐘
三五	金剛峯寺	和歌山県伊都郡高野町	弘安三年庚辰正月廿五日	一一八〇	大工沙弥専念	洪鐘
三六	千光寺	兵庫県洲本市上内膳	弘安六年美亥二月十八日	一一八三	大工平貞弘	鐘
三七	日撫神社	滋賀県坂田郡近江町顔戸	弘安六年未十月廿三日	一一八三		
三八	蓮華寺	滋賀県坂田郡米原町番場	弘安七年十月十七日	一一八四		
三九	竹林寺	高知市五台山	于時弘安第七甲二月二十五日	一一八四	大工左馬允紀盛忠	突鐘
四〇	大日寺	和歌山県海草郡美里町宮ノ前	弘安八年乙酉二月廿三日	一一八五		鐘
四一	興隆寺	愛媛県周桑郡丹原町	弘安九年丙戌五月 日	一一八六	大工河内助安	鐘
四二	華光寺	京都市上京区六軒町出水	正応元年壬十月十八日庚午	一一八八	大工搦則弘	鐘
四三	慈光寺	東大阪市東豊浦髪切	正応五年壬辰十一月廿四日	一一九二	大工山河貞清	鐘
四四	国分尼寺	神奈川県海老名市国分	正応五年壬辰十月六日	一一九二	大工和權守物都国光	槌鐘

四五	神宮寺	新潟県佐渡郡新穂村井内	永仁三年未 <sup>乙</sup> 九月 日	一一九五	銅匠藤原守重	推鐘
四六	東漸寺	横浜市磯子区杉田町	峇永仁六年 <sup>戊</sup> 孟春望日	一一九八	大工大和権守物部国光	洪鐘
四七	円覚寺	鎌倉市山ノ内	正安參年 <sup>辛</sup> 八月初七日	一一〇一	大工大和権守物部国光	大鐘
四八	安祥寺	京都市山科区安祥寺町	嘉元二二 <sup>香</sup> 歲次正月廿六日	一一〇六	鑄師河州且南部入道淨仏	洪鐘
四九	善光寺	山梨県甲府市里垣	正和二年歲次关丑六月 日	一一一三		蒲牢
五〇	正法寺	埼玉県東松山市岩殿	元亨二年□□□九日	一一二二		鐘
五一	増賀堂	奈良県桜井市多武峯	元亨三年六月 日	一一二三	鑄政之	鐘
五二	妙光寺	横浜市戸塚区瀬谷町	于時正中式年 <sup>乙</sup> 三月十七日	一一二五	大工物部守光	巨鐘
五三	広嚴院	山梨県東八代郡一宮町	嘉曆二季黃鐘廿七日	一一二七	大工兵衛大夫大江守光	洪鐘
五四	法泉寺	香川県高松市三番町	元徳二 <sup>丁</sup> 午青陽	一一三〇	大工宗蓮巴下等	椎鐘
五五	阿弥陀寺	東京都港区麻布広尾町	太歳庚午元徳二年三月二日	一一三〇	大工山城権守物部法名道光	洪鐘
五六	本立寺	静岡県田方郡韭山町	壬申元徳一年結制後十一日	一一三二		鐘
五七	地藏院	京都府宇治市白川	建武二年 <sup>乙</sup> 二月卅日	一一三五		椎鐘
五八	滝水寺	千葉県印旛郡本埜村	建武五年 <sup>戊</sup> 八月八日	一一三八		椎鐘
五九	真福寺	東京都板橋区下赤塚町	曆心三年 <sup>庚</sup> 四月初八日	一一四〇	大工平次五郎行次	鐘
六〇	堀氏藏	奈良県吉野郡西吉野村賀名生	康永元年 <sup>癸</sup> 八月 日	一一四二		鐘
六一	中尊寺	岩手県西磐井郡平泉町	康永式季 <sup>大</sup> 未 <sup>宋</sup> 七月 日	一一四三	鑄師散位藤原助信	椎鐘
六二	加賀田氏藏	新潟市西大畑	康永癸未五月	一一四三		宝鐘
六三	浄土寺	千葉県佐原市大戸川	貞和五年 <sup>己</sup> 十一月十五日	一一四九	大巧藤原末政	鐘
六四	東慶寺	鎌倉市山ノ内	觀応元年庚寅八月 日	一一五〇	大工大和権守光連	鐘
六五	安住寺	大分県杵築市南杵築	文和二年歲在癸巳五月十八日	一一五三	都匠上野実貞	鐘
六六	清浄光寺	神奈川県藤沢市西富	時也延文元年七月五日	一一五六	治工大和権守光連	鴻鐘
六七	満福寺	和歌山県海草郡美里町神野市場	正平十三年 <sup>戊</sup> 九月三日	一一五八		鐘
六八	妙満寺	京都市中京区二条寺町	正平十四年 <sup>己</sup> 三月十一日	一一五九	大工山田道順・小工大夫守長	鐘

六九	栖雲寺	山梨県東山梨郡大和村	延文己亥季冬廿日	一三五九	大工沙弥道金	鐘
七〇	新長谷寺	岐阜県関市長谷寺町	貞治貳零 <sup>卯</sup> 七月七日	一三六三	大工平末宗・小工藤原久繩	鐘
七一	放光寺	山梨県塩山市藤木	貞治五年 <sup>丙午</sup> 十二月廿七日	一三六六	大工 道金	鐘
七二	西願寺	大阪府柏原市雁多尾畑	正平二十二年 <sup>未</sup> 七月七日	一三六七	大工藤原則清	鐘
七三	長楽寺	千葉県印旛郡印西町大森	応安二寧十一月六日	一三六九	大工河内權守	鐘
七四	勝福寺	滋賀県長浜市祝町	応安六年 <sup>癸丑</sup> 閏十月三日	一三七三	大工藤原友吉	鐘
七五	妙興寺	愛知県一宮市大和町	永和第一 <sup>丙辰</sup>	一三七六	大工羽黒新兵衛尉	鐘
七六	永昌院	山梨市天坪	永和丁巳三月下濬	一三七七		鳴鐘
七七	西願音寺	京都府	康暦元年 <sup>己未</sup> 八月十八日	一三七九		鳴鐘
七八	引接山寺	京都市上京区北野千本通	康暦元年 <sup>己未</sup> 孟秋四六之天	一三七九	大工藤井国安	洪鐘
七九	浅草寺	東京都台東区浅草公園	至德二年 <sup>卯丁</sup> 五月初三日	一三八七	鑄工和泉守経宏	洪鐘
八〇	遍照寺	和歌山県伊都郡花園村深瀬	明德三年 <sup>甲午</sup> 二月 日	一三九二		鐘
八一	明星輪寺	岐阜県大垣市赤坂町	明德二 <sup>癸酉</sup> 年三月十二日	一三九三	大工藤原為繼	椎鐘
八二	円覚寺	鎌倉市山ノ内	応永丁丑仲春日	一三九七		鐘
八三	文珠仙寺	大分県東国東郡国東町大恩寺	応永二年 <sup>丁丑</sup> 三月十七日	一三九七	高田大工藤原貞正	推鐘
八四	総世寺	小田原市久野	応永十五年 <sup>戊子</sup> 十二月十三日	一四〇八	大工毛利常吉	鐘
八五	増賀堂	桜井市多武峯	応永廿三年 <sup>甲辰</sup> 卯月廿七日	一四一六		鐘
八六	長林寺	栃木県足利市西宮町	応永廿三年 <sup>甲辰</sup> 十一月廿一日	一四一六	大工性寿	推鐘
八七	守公神社	愛知県豊川市国府	応永廿三年 <sup>甲辰</sup> 十一月十五日	一四一六		鐘
八八	清水寺	島根県安来市宇賀莊町	于時 <sup>辛酉</sup> 応永廿八年 <sup>辛酉</sup> 重陽初八日	一四二一	和州住人大工友光	巨鐘
八九	勝福寺	大阪府川辺郡多田村?	正長元年 <sup>甲戌</sup> 十月	一四二八		鐘
九〇	来迎院	京都市左京区大原来迎院町	永亨七年 <sup>乙卯</sup> 十一月廿日	一四三五	大工藤原国次	鐘
九一	仲仙寺	愛知県宝飯郡御津町金野	干岩 <sup>丙寅</sup> 文安三年 <sup>丙寅</sup> 十一月十七日	一四四六	大工左衛門尉	洪鐘
九二	富賀寺	愛知県新城市八名	宝徳二年 <sup>庚午</sup> 十二月廿二日	一四五〇		鐘

九三	御津神社	愛知県宝飯郡御津町	享徳元年 <sup>申</sup> 十月十五日	一四五二	洪鐘
九四	妙興寺 <small>天祥庵</small>	愛知県一宮市大和町	享徳二稔龍集癸酉孟秋日	一四五三	鐘
九五	本誓寺	岐阜市矢島町	長禄二年 <sup>戊</sup> 九月十七日	一四五八	推鐘
九六	淨光寺	栃木県日光市挽板町	于時長禄三年 <sup>卯</sup> 十二月九日	一四五九	推鐘
九七	須磨寺	神戸市須磨区須磨寺町	長禄一年 <sup>辰</sup> 十一月十日	一四六〇	鐘
九八	昌林寺	愛知県豊川市森町	皆寛正五年 <sup>甲</sup> 十一月十五日	一四六四	鐘
九九	清凉寺	京都市右京区嵯峨藤ノ木町	文明十六年 <sup>甲</sup> 十一月吉日	一四八四	鐘
一〇〇	永住寺	愛知県新城市裏野	長享二年 <sup>申</sup> 十一月七日	一四八八	鐘
一〇一	太平寺	愛知県豊橋市老津	皆明応第四 <sup>乙</sup> 穩蜡月如意珠日	一四九五	鐘
一〇二	伊奈八幡宮	愛知県小室飯郡小坂井町	明応六年 <sup>丁</sup> 十一月廿一日	一四九七	鐘
一〇三	法藏寺	愛知県岡崎市本宿	明応七年 <sup>戊</sup> 霜月十七日	一四九八	洪鐘
一〇四	長谷寺	奈良県桜井市初瀬町	文龜元年 <sup>辛</sup> 十月九日	一五〇一	大鐘
一〇五	金剛峯寺	和歌山県伊都郡高野町	永正元年 <sup>子</sup> 卯月八日	一五〇四	推鐘
一〇六	宝積寺	京都市乙訓郡大山崎町	永正十六年 <sup>卯</sup> 六月十八日	一五一九	大鐘
一〇七	下醍醐寺	京都市伏見区醍醐東大路町	大永元年十一月二日	一五二一	鐘
一〇八	願行寺	奈良県吉野郡下市町	永禄十 <sup>丁</sup> 歳十月廿一日	一五六七	大工藤原左衛門尉家次
一〇九	道明寺	大阪府藤井寺市道明寺	永禄十二 <sup>己</sup> 年九月十日	一五六九	大工御船中藏人助桶直成他
一一〇	来迎寺	大津市坂本町	元龜三 <sup>壬</sup> 年菊月吉日	一五七二	大工和智大迫三郎左衛門
一一一	光得寺	岐阜県羽島郡笠松町下羽栗	天正歳舍 <sup>丙</sup> 仲春如意珠日	一五八六	大工兵衛太夫藤原友次
一一二	本国寺	京都市東山区山科御陵町大岩町	文禄癸巳九月吉辰	一五九三	鑄物師藤原国次
一一三	難波別院	大阪市東区北久太郎町四丁目	文禄五 <sup>甲</sup> 曆林鐘下旬第四日	一五九六	大工我孫子 <small>杉本藤原朝臣弘善左衛門尉家次</small>
一一四	常照寺	京都府北桑田郡京北町井戸	慶長九年甲辰九月日	一六〇四	治工野上氏意足
一一五	高台寺	京都市東山区下河原通	岩慶長十一年癸亥敦祥小春 <sup>申</sup> 辰 <sup>辰</sup>	一六〇六	三条釜座藤原对馬守国久
一一六	成相寺	京都府宮津市成相寺	于訖慶長十三 <sup>甲</sup> 年九月廿四日	一六〇八	大工助左衛門尉藤原久次 大工三郎左衛門尉藤原家次

一一七	大広寺	大阪府池田市綾羽町	峯慶長十四 <sup>酉</sup> 年二月吉辰	一六〇九	大工	我孫子住人藤原朝臣 田端与右衛門尉正家	洪鐘
一一八	九品寺	奈良県御所市橘原	峯慶長十五 <sup>戌</sup> 季三月吉日	一六一〇	大工藤原氏重久		洪鐘
一一九	法藏教寺	愛知県岡崎市本宿	峯慶長十七 <sup>子</sup> 曆	一六一二	大工藤原氏重久		洪鐘
一二〇	万精院	和歌山市鈴丸町	峯慶長拾九年 <sup>甲</sup> 三月三日	一六一四	鑄物師撰州天王寺 五郎右衛門藤原朝臣長次		鐘
一二一	仲仙寺	宝塚市中山寺字独鈷尾	于時元和四年 <sup>丙</sup> 三月十八日	一六一八	治工石津太郎藤原正治		鐘
一二二	大阪町中鐘	大阪市役所屋上	寛永十一 <sup>甲</sup> 閏逢聞茂季秋吉日	一六三四	治工藤原家次		鴻鐘
一二三	高野山 六時鐘	和歌山県伊都郡高野町	寛永十二 <sup>乙</sup> 曆卯月十二日	一六三五	治工和田出雲藤原因久		華鐘
一二四	智恩院 大谷寺	東山区智恩院大谷寺	寛永十三 <sup>丙</sup> 曆九月十五日	一六三六	治工和田出雲藤原因久		洪鐘
一二五	唯專寺	大阪府浪速区鷺町二の番外二	寛永 <sup>丁</sup> 拾四歲閏正月拾五日	一六三七	大工藤原家次		洪鐘
一二六	本專寺	寝屋川市四条爰町	峯寛永十四 <sup>丁</sup> 応鐘中旬	一六三七	治工撰州天満住藤原茂元		洪鐘
一二七	西方寺	京都府綴喜郡田辺町大字飯岡	于時寛永十六 <sup>己</sup> 卯年三月到彼岸日	一六三九	鑄師洛陽三条釜座西村治兵衛家次		洪鐘
一二八	大蓮寺	大阪府天王寺区下寺町一ノ一	于時寛永十九 <sup>壬</sup> 年初夏二十五日	一六四二	治鑄大工藤原正次		洪鐘
一二九	醍醐 白山神社 宝塔院	京都府 高槻市原三三〇一の一	寛永之十有九季黄鐘之吉日良辰	一六四二	大工藤原次良左衛門尉家次		洪鐘
一三〇	神峯山寺	高槻市原三三〇一の一	正保第二 <sup>乙</sup> 曆二月吉祥日	一六四五	大工藤原次良左衛門尉家次		洪鐘
一三一	本覚寺	大阪府南区中寺町七	正保第二 <sup>乙</sup> 曆仲秋中旬八	一六四五	大工藤原次良左衛門尉家次		洪鐘
一三二	長福寺	愛媛県周桑郡壬生川町北条	明曆元 <sup>甲</sup> 午歲正月日	一六五五	治工藤原三知		擊鐘
一三三	西慶寺	大阪府東区天満橋	寛文元年辛丑六月 日	一六六一	治工藤原三知		擊鐘
一三四	浄国寺	大阪府天王寺区下寺町	峯寛文二 <sup>壬</sup> 歲四月十三日	一六六二	大工仏金屋清右衛門藤原家次		鐘
一三五	願泉寺	大阪府浪速区大國町	寛文三 <sup>癸</sup> 曆四月二日	一六六三	治工堺菊波出雲少掾藤原家次		梵鐘
一三六	一心寺	大阪府天王寺区逢阪 二の一〇〇の二〇 上之町一五五	峯寛文四 <sup>甲</sup> 辰龍集八月廿五日	一六六四	治工三条釜座和田信濃大掾藤原因次		撞鐘
一三七	本誓寺	大阪府天王寺区生玉	寛文八 <sup>戊</sup> 申年十月三日	一六六八	治工大坂住堀惣左衛門尉藤原家次		洪鐘
一三八	重願寺	不明	延宝五 <sup>寅</sup> 歲七月廿一日	一六七四	治工堺菊波太郎左衛門尉藤原家次		洪鐘
一三九	久本寺	大阪府南区谷町八ノ三ノ二	延宝五 <sup>丁</sup> 曆卯月二十五日	一六七七	治工堺住菊波相模藤原宗次		洪鐘
一四〇	本照寺	大阪府南区谷町八ノ七ノ三	延宝第五大歳在丁巳三月如意珠日	一六七七	治工長谷川信吉		蒲半

一四一	本伝寺	大東市三住町一〇の一〇	延宝六 <sup>戌</sup> 孟夏弘護日	一六七八	治工長谷川久左衛門尉藤原信好	鐘
一四二	福泉寺	大阪市南区中寺町一八の三	延宝八 <sup>申庚</sup> 年九月廿三日	一六八〇	治工堺住菊波相模藤原宗次	鐘
一四三	正念寺	宝塚市山本字東宮ノ前二〇の一	天和二年龍轉壬戌春二月消長	一六八二		
一四四	安楽寺	大阪市天王寺区生玉	千時貞享二 <sup>乙丑</sup> 曆七月廿三日	一六八五	治工山城住藤原朝孫松下吉次	梵鐘
一四五	願生寺	大阪市南区谷町八の一四の二	貞享二 <sup>乙丑</sup> 歲大呂陽日	一六八五	治工山城住藤原松下吉次	洪鐘
一四六	大安寺	大阪市天王寺区生率寺町四三	貞享三丙寅年四月八日	一六八六		蒲半
一四七	善福寺	大阪市天王寺区下寺町	貞享四 <sup>卯</sup> 歲美景如意珠日	一六八七	治工藤原宗信	寶鐘
一四八	天徳山 國分寺	大阪市天王寺区國分町一六五	貞享五年歲在戊辰孟春吉旦	一六八八	大坂住富永	寶鐘
一四九	無量寺	大阪市天王寺区東高津	貞享五年歲在戊辰孟春吉旦	一六八八	治工洛陽釜座近藤丹波掾藤原佐久	洪鐘
一五〇	正法寺	大阪市南区中寺町九の二	元禄二 <sup>癸巳</sup> 歲八月十五日	一六八九	治工大坂住長谷川久左衛門	寶鐘
一五一	泉涌寺	京都市東山区泉涌寺山内町二七	元禄四 <sup>癸巳</sup> 季龍集辛未夾鐘十五日	一六九一		
一五二	宝珠院	大阪市北区東寺町一二の七	元禄五 <sup>癸巳</sup> 裸龍舍壬申秋九月令日	一六九二	治工洛陽美濃大塚	漏鐘
一五三	正覚寺	大阪市天王寺区下寺町	元禄六 <sup>癸巳</sup> 酉年四月廿一日	一六九三		梵鐘
一五四	雲雷寺	大阪市南区中寺町一八	茲時元禄九 <sup>丙午</sup> 年二月十九日	一六九六	鑄物師長谷川久左衛門	鐘
一五五	銀山寺	大阪市天王寺区生玉寺町四一	元禄十四龍集辛巳載 八月十有五日	一七〇一	工人藤原宗信	鐘
一五六	津村別院	大阪市東区本町四の二七	元禄辛巳秋閏八月五日	一七〇一		華鐘
一五七	寿法寺	大阪市天王寺区勝山通 一〇二四六	元禄十五 <sup>丙午</sup> 年歲十月十五日	一七〇二	治工三条釜座和田信濃大塚藤原國次	洪鐘
一五八	慈教寺	不明	元禄十五 <sup>丙午</sup> 年八月吉辰	一七〇二		梵鐘
一五九	寒山寺	大阪市北区西寺町二の一〇	元禄十六歲舍癸未仲冬天赦大祥日	一七〇三	三条釜座和田信濃大塚藤原國次	鉦鐘
一六〇	妙経寺	大阪下南区谷町	元禄十六 <sup>癸巳</sup> 未祀八月十六日	一七〇三		鉦鐘
一六一	若王寺	京都府相楽郡精華町下狛	宝永六巳丑稔初秋吉辰	一七〇五	大工藤原國吉	鴻鐘
一六二	神護寺	岐阜県安八郡神戸町九七八	宝曆七年	一七一〇	治工入道実円	鐘
一六三	西方寺	滋賀県高嶋郡新旭町 太田一七二八	正徳三癸巳年閏五月廿五日	一七二三	治工洛陽三条釜座近藤丹波掾藤原久	鐘
一六四	光得寺	大阪市東区北久太郎町四の六八	千時享保十二 <sup>丁未</sup> 歲林鐘朔旦	一七二七	治工大谷相模掾藤原正次	撞鐘

一六五	徳林寺	不明	時維享保十三龍集 <small>改</small> 四月十五日	一七二八	治工撰州松本庄兵衛尉藤原重光	洪鐘
一六六	真光寺	大阪府泉南郡佐野	宝曆年中	一七五一		鐘
一六七	正徳寺	不明	天保十一年歲次庚子孟春吉日	一八四〇		大鐘

その他年代不明鐘 8 朝鮮鐘 22 明鐘 2